

総合芸術「創作オペレッタ」実施の教育的意義と 北海道女子大学短期大学部 初等教育学科における 22 年のあゆみ

Educational Significance of Original Operetta as a Synthetic Art and
its 22 year's Course at the Department of Elementary Education,
Hokkaido Women's Junior College

桑 原 雅 子

Masako KUWABARA

I はじめに

学習指導要領では、創造的な音楽活動を通して、子どもの自己表現力を育てることの重要性を強調している。これに対し、教育現場では「つくって表現する」活動を取り入れた授業が多く展開されるようになった。そうした中で、音楽を多くの形態で表現できる活動にオペレッタやミュージカルがあげられる。音楽表現の形態はどうであろうともこれらは「創造的」な活動であると考えられる。ここで重要な事は、表現の中に子ども一人ひとりがどれだけ自分の個性を生き生きと発揮できるか、感情をどう表現できるかである。教師や子ども同士がそれをより感じたときにその表現は「感動的」なものとなる。子どもの自己表現力を育てるということは、いかに子供たちと教師が「感動体験を共有」できるかにかかっている。まさに、今問われている音楽活動のひとつである事には違いない。

さて、幼稚園・小学校の教員養成を目的としている北海道女子大学短期大学部初等教育学科の「創作オペレッタ」の取り組みは、音楽室でアングラ劇場のように楽しんだ昭和 51 年からの 4 年間を含め、惜しまれながら最終の幕を降ろした平成 9 年まで 22 年の長きにわたって行われた。

そこで本稿では、本学初等教育学科での総合芸術「創作オペレッタ」実施の教育的意義と 22 年の取り組みをここに報告するものである。

II 音楽劇（オペレッタ、ミュージカル）における音楽教育の意義

音楽劇は人間が育つ、子供が育つ上で大切な総合的活動である。指導者自信がまず音楽劇の表現を楽しむことが、音楽劇への近道です。音楽劇の魅力はどこにあるのかというと、人間が自分以外のものの気持ちになれるところにある。これは、演劇の魅力にも通じます。

ここで、オペレッタとミュージカルの違いを述べておこう。オペレッタの大きな特徴は、子どもの創作活動を単に、セリフ部分のメロディー化にとどまらず劇中における衣装、せりふ、

動きなどを子どもたち自身で考えていくことも創作活動として捕える。オペラ、オペレッタは、アリアをセリフでつないでいますが、近年は、セリフそのものもあり演劇的な部分もある。ミュージカルは、衣装、せりふ、動きの創作はもちろんのこと、歌と芝居とダンスの3つの要素を同時に楽しむことができる。いまミュージカルが多くの観客の心をつかんでいるのも、演奏あり、ダンスあり、ストーリーあり、笑いあり、涙や感動があるからである。近年、劇団「四季」などを中心としたミュージカル等連日上演され、多くの観客を動員している。

一方、オペラやオペレッタはと言うと公演回数も少なく、客層も小・中・高生の姿などは少ない。平成9年東京新宿に新国立劇場のオペラホールが新設され、わが国のオペラの隆盛が期待される場所である。

またミュージカルはというと、子どもから大人まで客層も厚く、子ども向けの作品から本場ブロードウェイでヒットした本格作品まで鑑賞でき、エンターテインメントとして十分に条件を満たしている。

これらのことより、音楽劇の取り組みは音楽が得意な者もまた不得意な者も主体的に取り組める事となる。いずれにしても音楽劇は、子どもの新たな能力を引き出し、意欲を喚起し、個性を生き生きと発揮せられ、教育的にみても有意義な教育方法と言えよう。音楽劇の中でも、単に大人の楽しみのための音楽劇ではなく、人間が育っていく、子ども達が育っていく上で、知識教育では補われない部分を音楽劇の活動の中で体験できるところに最大の意義があるといえる。これまでの学校教育では、例えば、絵を描くとかとか、工作をするとか、歌をうたうとか、楽器を弾くという体験にしか、知識教育で捕えられない部分を補えないと思っていた。ところが、音楽劇はそういうものを全部総合してもっており、しかも教育現場で効果的に強いインパクトで演劇的手法、考え方が生かされている。また、音楽劇には脚本があり、音楽で表現するほかに、登場人物の生き方まで学ぶことができる。

子どもの頃、テレビや映画の登場人物になりきって物差しや風呂敷が刀やマントがわりにな

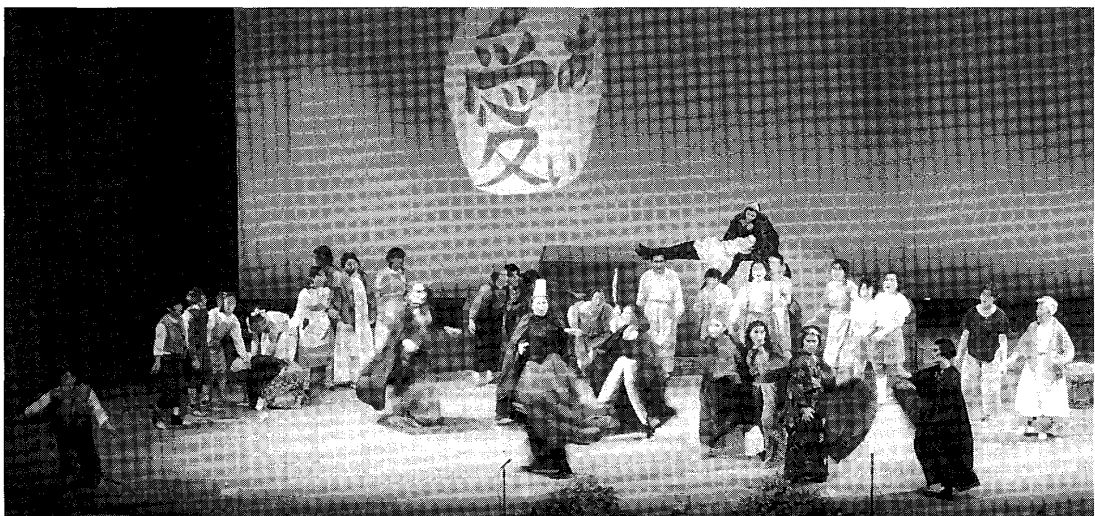


写真1 第6回 オペレッタ「小さな魔女」より

りその刀やマントをつけて登場人物になりきり、最高の気分で、思いっきり主題歌を歌い、ごっこ遊びを楽しんだりしたものである。このように、遊びから始まって、変身ごっこ、フィクションの世界で遊ぶ「ごっこ遊び」が充実していきます。更に指導者の上手な関わり方でおもしろい「劇遊び」となる。こういうことを体験しながら、自分の知らない世界を思い描くことができるのです。こういう経験をどんどん積むうちに、単純なものを体験したら、次にもう少し次の段階を経験したいと学習意欲が湧いてきます。

本学初等教育学科は、人間形成の専門職たる幼稚園・小学校の教員養成を目指す目的学科として設置され、とくに、音楽・図工・体育に優れた教員の養成を目指し、自由に独自に創造するセンス、感覚が幼稚園、小学校などの教育現場で生かされることが大変素晴らしいと考えたわけです。普通、教育学、心理学、音楽では楽典のような、知識のみを完璧に頭に詰め込まれて教育現場に出される。教育現場ではじめて子どもたちとの接し方を苦労しながら獲得し、積み上げてはじめてベテランになるというのが今の過程である。

しかし、知識社会と同時にそれとは正反対の感覚的な部分を尊重し、ある日は朝から心理学をやり、精神衛生を勉強し、国語、体育の授業をし、かと思えば、翌日は朝から大人でありながら、子どもになって動いてみる体験をする。次の時間は造形活動。それも、何を作るかというよりも「作るって面白いな」という体験をする。遊びながら、子どもが体験することをどんどん体験していく。それが終わると、音楽の授業。もちろん理論のみを学ぶのではなく、子どもが慣れ親しんでいる曲を、曲集の最初から自分で歌ってみたり、また、その辺にある楽器でその曲を膨らませていって、みんなで大合奏をする。なかには、とんでもない本物ができてしまうこともある。

幼稚園、小学校の教師を育てる指導者として、「どういうことを経験してもらうことが教師を目指している学生たちにとって必要なのか」などいろいろ考えます。まず、歌やピアノを上手に歌い、弾けるようにするとか考えるが、これはできるにこしたことはないが、もっと総合的に、実践的に考えていかなければならない。授業のときには、技術も教えるが、それをどのように使うかは実際に経験してみなければわからないので、さまざまな創造活動を経験してみることです。既成の音にとらわれず、音として素晴らしいと感じられれば音楽表現の中にどんどん取り入れるべきである。更に、これをもう少し総合的にしたものがオペレッタといえよう。

今の学生たちは、与えられたものはやるが、自分から工夫してやることは、得意ではなさそうである。そこで、自分から何かを発見し、納得するには、個性の違う一人ひとりの状態にあった無理の無い活動ができる創作オペレッタが一番良いようである。

オペレッタは、「つくって表現する」音楽劇であり、総合的な活動の醍醐味があり、エネルギーと発想を生かす場であることから、生きた総合教育といえよう。

Ⅲ 本学初等教育学科に於ける「創作オペレッタ」のあゆみ

本学初等教育学科は、昭和44年4月、人間形成の専門職たる小学校・幼稚園教諭の養成を目

的とする、目的学科として、設置された。また、大きな特質としては、入学後、音楽・図画工作・体育の3コースに別かれ、音・図・体の技能科目に特に優れた教員の養成を目指し、50年には音楽棟も完成をみた。

本学での最初の「創作オペレッタ」取り組みは、音楽棟完成の翌51年でした。2月、音楽コースの学習成果を多くの人びとに鑑賞してもらおうと、学内で最初の「音楽発表会」が開催された。最初は、予算も少なく会場の音楽室には幕一つなく、すべて手づくりのものでした。観客席には、他学科から借用のゴザを敷いてのいわゆるアングラ劇場そのものでした。しかし、出し物は、合唱、ピアノ独奏、連弾、合奏、創作オペレッタと多彩なもので、特にオペレッタは、脚本、舞台装置、音楽のすべて「音楽リズム」選択学生のオリジナルによるもので、笑いあり、涙ありの熱演ぶりは、観客を感動させ、会場をおおいに湧かせた。以後、昭和54年まで、出し物に創意工夫を重ね、年を重ねるごとに内容も充実され、小作品を3～4作、毎年4回行われた。

昭和55年、「学内における学習成果の発表により、音楽を通じて地域社会の子どもたちと本学学生との交流」又「本学と江別市教育界とのいっそう綿密な関係を深めること」という目的のもと、江別市民会館を会場に大々的に「音楽会」が開催する運びとなった。

第1回音楽会は、昭和55年11月15日(土)、江別市教育委員会の全面的協力と、北海道新聞社、北海タイムス社、朝日新聞社、毎日新聞北海道支社および読売新聞社、NHK札幌放送局6社の後援を得て江別市民会館大ホールにおいて開催された。

プログラムの内容は、幼・小・中学校の子どもたちに親しまれる曲を学生自身の手で選択構成された。1・2年音楽コース・専攻科・児童演劇研究履修生の総勢151名の出演者による、女声合唱・ピアノ連弾・ピアノ独奏・器楽合奏・オペレッタ「金のがちょう」の熱演に、大ホールをうめ尽くすほどの観客からあたたかい拍手を受け、初回としては一応成功をおさめることができた。

創作オペレッタは、54年まで保育内容音楽リズムの中の学習成果として発表していたが、55年から新たに児童演劇研究という講座が開設され、ますます内容の充実したものとなった。

第2回音楽会は、56年11月14日(土)、前年度の反省事項に基づき、内容構成、運営進行、PR等に改善を加え、地域の子どもたちに応えるべく、教官と学生が一体となって指導、練習を重ねた。1回目は音楽コースが主体であったが、第2回目は、体育コース学生のアトラクションや図画工作コースの舞台装飾参加等、学科全体の行事となるよう改善された。2回目のオペレッタは、履修生64名による「ブレーメンの音楽隊」であった。

第3回音楽会は、57年10月30日(土)、さらなる改善を加え、初等教育学科のゆるがぬ行事となっていった。学生の創作に、学科を上げての知恵と相違工夫に、格別洗練された演技に、場内拍手喝采がなりやまず、学生とともに、このうえない満足感と充実感をおぼえたものでした。この成功は、出演者のほかに、裏方をかってでてくれた裏方さんの力添えもあったことを忘れてはならない。この時のオペレッタは、履修者97名による「森は生きている」であった。特に



写真2 第17回 オペレッタ「ふしぎの国のアリス」から

児童演劇研究については、複数の講師の担当制とし、以来第18回まで、音楽、絵画、舞踏表現の総合的活動の場として、また、エネルギーと自由な発想の場として、年々新たな目標を目指して練習を重ねておりました。

また、各新聞者が記事に取り上げてくれることもあって、江別市民ばかりではなく、札幌市民からのチケットの問い合わせも年々増え続け、平成4年には、とうとう1,062名の会場の収容定員を大幅に超え、子どもたちの安全対策上、止むを得ず入場を断わらざるを得なくなった。

このような事態を鑑み、平成5年度から、プログラムの前半のピアノ演奏や合唱・合奏は学内で発表することとし、子どもが最も楽しみにしている創作オペレッタは、より安全に楽しく鑑賞してもらうため2回公演と決定した。以後、対外的にも、オペレッタのみの、すっきりとした形で平成9年まで続いた。

毎年10月公演のオペレッタのは、超満員の子どもたちの拍手の中で終演の幕が下りる。ステージの上では、学生たちの歓声が沸き上がり、思わず泣き出すもの、抱き合うもの、様々な学生の心からの喜びの姿、照明係、音響係、舞台係も、誰もが汗と涙を拭っている光景は、何度みてもいいし、すべての苦勞が拭き飛んでしまいます。

表1 計画から上演までの年間スケジュール

9月～12月	舞台、脚本、音楽などの基礎指導、スタッフ決定
1月～3月	題材選択、決定、脚本作り（春休み中）
4月	脚本決定、印刷
4月～5月	オーディション、キャスト決定
6月～7月	読み合わせ、大道具、小道具、衣装（原案作成）、テーマソング作曲
8月～9月	自主練習、パート練習、全体練習、作曲、大道具、小道具、衣装制作開始
10月	会場スタッフとの打ち合わせ、リハーサル、本番

学生たちは、オペレッタの公演終了後も毎日のように制作室としてつかった音楽室に集まっています。あまりにもエネルギーに打ち込んでいたためか、その後生活にポカンと穴があいたようで、知らず知らずのうちに音楽室に足が向いてしまうというのです。

児童演劇研究は、1年目後期から2年目前期までの1年間の行われ、この講座の集大成として、毎秋大々的に江別市民会館でオペレッタの学外発表が行われる。1年間の講義終了後、学生たちは、夏休みを返上しての自主練習を始める。

「格好いいことはやりたいけれど、苦労はしたくない」という、現代気質の学生のことですから、当然夏休み返上などというつらい講義はとらないはずですが。しかし、オペレッタの公演を観て、感激し、是非履修したいと受講者が増える訳です。

オペレッタの学外発表会はこれまで18回、公演時間1時間とし、「金のがちょう」「ブレーメンの音楽隊」「森は生きている」「青い鳥」「ピーターパン」「小さな魔女」「ユタとふしぎな仲間たち」「オズの魔法使い」「人間になった猫」「おもちゃのさいばん」「ピノキオ」「雪の女王」「11ぴきの猫」「チポリーノの冒険」「やさしくしてください」「モモ」「ふしぎの国のアリス」「みどりのゆび」といった作品を発表してきました。週1回の講義の中で、学外発表を最終目的として、見通しを立て、計画的に進めていく。全体としての計画は次のようである。

題目決定と台本づくり

題目については、全員が各自1題目提出（既成の作品でもオリジナル作品でもよい）し、全員が、自分の選択した題目の選択理由、ストーリーを説明する。その説明を聞いた上で、5題目にないし6題目に絞り、最終的に1つに絞り込まれる。決定された作品は、脚本係（2～3人）がオリジナルの脚本作成に取りかかる。春休み中に台本を完成させ、4月に入ると台本をもとに希望のキャストを演出に申し出、歌と演技のオーディションを受け、キャストが決定される。

音楽づくり

オペレッタには音楽が当然必要です。音楽は、オペレッタの雰囲気を作る重要な鍵をにぎっているのです。ただ歌うのではなく、聞かせる歌、感動させる歌に近づけるため、曲作りのアド



写真3 第18回 オペレッタ「みどりのゆび」から

バイス、歌唱指導もする。音楽係は、台本を読んで、まずテーマソングの作曲に取りかかる。テーマソングは誰でも歌いやすく、親しめるメロディーを考える。テーマソングができ上がり、皆で歌うようになると、気持ちは盛り上がってくるものです。既成の曲はほとんど使わず、役の性格や内容、歌う人の音域を考慮しながら作曲し、実際に歌ってみては、何度も手直しされメロディー譜ができ上がる。最初は、ピアノ伴奏で歌っていきませんが、最終的には、ピアノやエレクトーン、キーボード、フルート、シロフォン、パーカッションなどを中心として伴奏符が完成されます。

衣装，大道具，小道具づくり

それぞれの係は、制作図を作り演出に提出。演出のオーケーが出ると制作に取りかかる。夏休みの自主練習に入ると、午前が演技の練習、午後が制作の時間に当てられ、音楽室やピアノの練習室で制作作業がされます。夏休み以降本番まで音楽室は、大道具の制作室と化し、オペレッタ制作専用室となる。この部分については、任せておいても、びっくりするような見事な出来の衣装や小物があつたり、物語を表現している背景画、場面を生かした照明操作など日常生活での知恵を結集させ、黙々と何時間でも取り組んでいる。

オペレッタの出演者が、プログラム、ポスター、チラシ、チケットから大道具などの制作まですべて準備するのですから、苦労は並みのものではありませんが、最終的にこの苦労も一つの楽しみになっていくようです。

本番にむけて

発表の1週間位前には学内で、音響、メイク、衣装をつけてゲネプロを行なう。この時全体をみて照明、音響の係は細部に渡って打ち合わせを行なう。この日は、報道関係者にも取材をお願いします。1時間の通し稽古で学生の顔は別人のように変わり、本番にかける気持ちが演技になって現われ、緊張感のなかにも何とも言えない充実感がみなぎる。この週には、会場となる市民会館に向き打ち合わせを行ない、本番前日午前には荷物を搬出、仕込み後、午後リハーサルとなり夜8時頃まで続く。本番当日、朝から最後のリハーサルを行ない本番に臨む。迫真の演技で観客を魅了す。幕を閉じた後の感動は経験したものにはしか味わえない、言葉では言い尽くせない成就感と満足感がある。

最近の子どもたちは、受動的な音楽体験が多い中で、「ヤッタ！という喜び、感動」を体験させるには、エネルギーと学生の自由な発想と活動を生かす場として、オペレッタは最適と思われる。登場人物になりきる事で、役割上必要な歌唱表現を自ら求めますし、集団の場を作り出す葛藤の中から何か生まれてくるのではないか。また、指導者の一言でできばえや意欲が違って来る。例えば、動作が小さい人には「指先まで神経を使って」とか「格好悪いよ」とか「決まってるね」と言ったその「一言指導」は影響がおおきい。「もっと格好良くみせたい」という気持ちが意欲的に表現力を高めていく事となる。

初等教育学科における創作オペレッタの年間スケジュール及び音楽会のあゆみは、表1、表2に示す通りである。

IV ま と め

創作オペレッタは、題名からストーリー、音楽などすべて学生自身の創作によるものです。時間はかかるが、その中に教育としての内容のすべてが盛り込まれている。

創作オペレッタをやり終えると、学生たちは変わります。大変だったが与えられた音楽ではなく、「自分たちで音楽を作ることがこんなにも楽しいことだったのか」と変わっていく。

当然ながら、いろいろな苦勞が指導者側にまわってくるが、学生がやりたいと思うことは十分に経験させてやりたい。

実践のあとでの感想文には、毎回必ず「こんな経験は今までしたことがない」と書かれます。ある程度の方法を教えると、その後は自分たちに任せられることが、快樂になってくるようだ。子どもたちの「つくりたい、やりたい」と思う気持ちを伸ばしていくことは、「教師を目指す学生こそ、是非こういう体験をすべきだ」という考えからくる。劇の形態をとる音楽の表現方法にはいわゆる、やらせが多いといわれているが、そうではなく、本当にその人物になりきって遊ぶごっこ遊びの世界が大切である。

子どもの世界では、それが日常生きているので、「教職をめざす学生にも是非、そういう経験をさせたい。」というのが、オペレッタをする一番のねらいです。遊び心を大切に、登場人物を演じることを楽しみ、大勢の人とふれあうことの喜びを味わってほしい。

総合的な創造活動を通して得た全人格的な収穫は、授業の中だけでは得られるものではなく、学校生活、社会生活のさまざまな場面に必ずやよい影響を及ぼすと思われる。

本学のオペレッタは、平成9年をもって、カリキュラムの関係上、惜しまれながら最後の幕を降ろしましたが、音楽劇の心は、本学学生はもとより多くの子どもたちに伝えられたと確信しております。

謝 辞

今日までご声援くださいました皆様を始め、長年にわたって後援くださいました江別市教育委員会、江別市民会館、報道関係各社の皆様に厚くお礼を申し上げます。長年にわたって児童演劇研究をご担当をいただきました本山節也先生、武内昭二先生、林清子先生に厚く感謝申し上げます。また、浅井幹夫学長はじめ、多大なご協力をいただきました初等教育学科の諸先生、あたたかなご支援、ご助言をたまわりました本学教職員の皆様にも厚くお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 教育音楽小学版 第49巻第3号 音楽の友社 (1994) 39-47
- 2) 教育音楽 [別冊] 『音楽劇』初めての取り組み, 音楽の友社 (1997)
- 3) 教育音楽 [別冊] 『音楽劇』表現意欲を育てる指導法, 音楽の友社 (1998)

表2 初等教育学科音楽会のあゆみ

	開催年月日	全体プログラム	オペレッタ名
第1回音楽会 江別市民会館	昭和55年11月15日(土) 14:00~16:00	合唱/ピアノ独奏・連弾/合奏 /オペレッタ	金のガチョウ (履修者50名)
第2回音楽会 江別市民会館	昭和56年11月14日(土) 14:00~16:00	女声合唱/ピアノ独奏・連弾/ 器楽合奏/アトラクション/ オペレッタ	プレーメンの音楽隊 (履修者64名)
第3回音楽会 江別市民会館	昭和57年10月30日(土) 14:00~16:00	女声合唱/ピアノ独奏・連弾/ 器楽合奏/アトラクション/ オペレッタ	森は生きている (履修者97名)
第4回音楽会 江別市民会館	昭和58年10月22日(土) 14:00~16:00	女声合唱/ピアノ独奏・連弾/ 器楽合奏/アトラクション/ オペレッタ	青い鳥 (履修者116名)
第5回音楽会 江別市民会館	昭和59年10月27日(土) 14:00~16:00	女声合唱/器楽合奏/アトラク ション/オペレッタ	ピーターパン (履修者73名)
第6回音楽会 江別市民会館	昭和60年10月26日(土) 14:00~16:00	女声合唱/器楽合奏/アトラク ション/オペレッタ	小さな魔女 (履修者80名)
第7回音楽会 江別市民会館	昭和61年10月25日(土) 14:00~16:00	女声合唱/器楽合奏/全体合唱 /アトラクション/オペレッタ	ユタとふしぎな 仲間たち (履修者81名)
第8回音楽会 江別市民会館	昭和62年10月17日(土) 14:00~16:00	女声合唱/器楽合奏/全体合唱 /アトラクション/オペレッタ	オズの魔法使い (履修者47名)
第9回音楽会 江別市民会館	昭和63年10月15日(土) 14:00~16:00	女声合唱/器楽合奏/全体合唱 /アトラクション/オペレッタ	人間になった猫 (履修者48名)
第10回音楽会 江別市民会館	平成元年10月20日(土) 14:00~16:00	女声合唱/器楽合奏/全体合唱 /アトラクション/オペレッタ	おもちゃのさいばん (履修者75名)
第11回音楽会 江別市民会館	平成2年10月20日(土) 14:00~16:00	女声合唱/壁画コンテスト/ 器楽合奏/アトラクション/ オペレッタ	ピノキオ (履修者59名)
第12回音楽会 江別市民会館	平成3年10月19日(土) 14:00~16:00	女声合唱/器楽合奏/マーチン グ・バンド/アトラクション/ オペレッタ	雪の女王 (履修者67名)
第13回音楽会 江別市民会館	平成4年10月17日(土) 14:00~16:00	女声合唱/器楽合奏/マーチン グ・バンド/アトラクション/ オペレッタ	11ぴきの猫 (履修者52名)
第14回音楽会 江別市民会館	平成5年10月16日(土) 1回目 12:30~ 2回目 15:00~	マーチング・バンド オペレッタ	チポリーノの冒険 (履修者82名)
第15回音楽会 江別市民会館	平成6年10月15日(土) 1回目 12:30~ 2回目 15:00~	マーチング・バンド オペレッタ	やさしくして ください (履修者79名)
第16回音楽会 江別市民会館	平成7年10月7日(土) 1回目 12:30~ 2回目 15:00~	マーチング・バンド オペレッタ	モモ (履修者72名)
第17回音楽会 江別市民会館	平成8年10月12日(土) 1回目 12:30~ 2回目 15:00~	マーチング・バンド オペレッタ	ふしぎの国のアリス (履修者48名)
第18回音楽会 江別市民会館	平成9年10月25日(土) 1回目 12:30~ 2回目 15:00~	マーチング・バンド オペレッタ	みどりのゆび (履修者41名)

「みどりのゆび」テーマソング

チトは天使だった

作曲 音楽隊

Chito wa fushigi na o toki no ko - ichido sono yubi
 hayasashi o toki no ko - kamisamakureta

fureta nara soko wa suteki na ha na no se kai - minna ni shiawase
 sono yubi de donna koto ni mata chi - mukai - minna ni shiawase

1. F 2. F B \flat F
 hachibimasu chito ataeimasu - omoi yari to soko shi no yuuki -

C 7 F 7 B \flat A 7 Dm
 itsudemo sore o wasurezu ni - hito o shiawase ni suru koto wa dare

G 7 C 7 F
 ni mo dekiru kara - - kitta aru wa

C Dm Am B \flat
 zu - bo ku - ra ni mo - chito no

F D $\sharp 7$ Gm 7 C 7 F
 you na - tsubasa ga - kitta aru wa

C Dm Am B \flat
 zu - bo ku - ra ni mo - chito no

F D $\sharp 7$ Gm 7 C 7 F
 you na - ten shi no tsubasa ga -

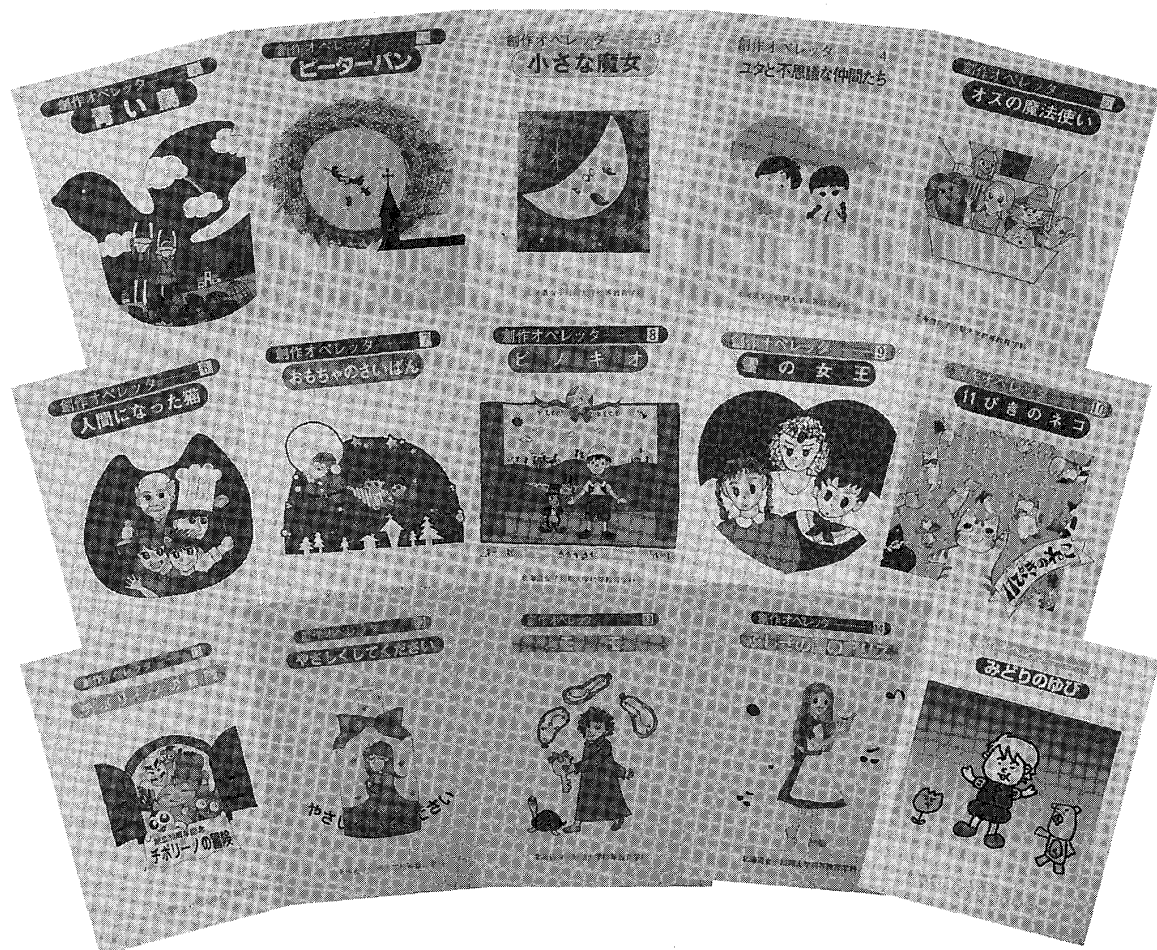


写真4 オペレッタ記念誌とポスター